ゆうことみゆきの
なるほど
アイヌ文化エッセイ

ソンコ de ソンコ

Vol.124

アイヌ文化のことをもっともっと話したい!
本田優子と村木美幸の二人が、その魅力を交代で執筆するソンコ(=お便り)形式のエッセイです。

今月のテーマ

イソカピウ(アホウドリ)

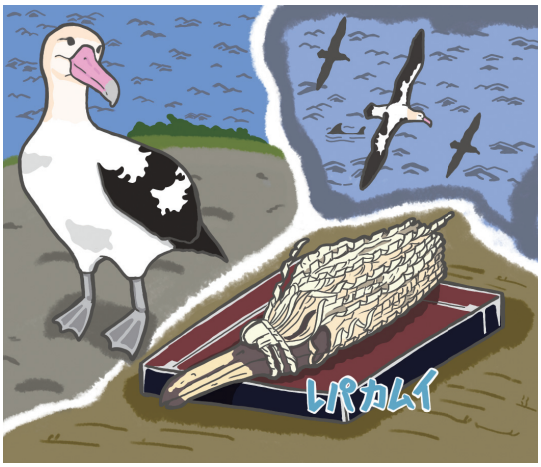
村木美幸(アイヌ民族文化財団常勤理事)

翼を殆ど動かすことなく数百キロもの距離を滑空するというアホウドリ。子育て以外は海上で過ごす、生粋の海鳥で、細く長い翼は三メートル以上のものもあり、風の向きを巧みに利用して上昇したり降下したりと、海上を飛ぶ姿はとても美しいといいます。反面、水鳥あるあるですが、陸上での動きは鈍く、腰高にヨチヨチと歩く姿はとても不格好なんだとか。先端が鈎(こう)状に尖った長い嘴(くちばし)も特徴的なアホウドリ、北海道近海では三種がみられるといいます。

アホウドリはアイヌ語でイソカピウやオンネチカプ、オシカンペ、また、アホウドリの頭骨をイナウル(削りかけ)で包んだものをレパカムイ(沖漁の神)やシラッキカムイ(卜占(ぼくせん)の神)、レプンシラッキ(沖の卜占神)などと呼んで、漁のカムイ(神)として、また、病魔を払うカムイ、占いをするカムイとして、どこの家にも祀られていたカムイだったといいます。

海漁の盛んな白老でもアホウドリの頭骨は豊漁や漁の安全を守るカムイとして、屋内のイヨイキリ(宝物置場)に漆器類と一緒に置かれ、沖へ漁に行く時には必ず携帯をしたといいます。夏の時期におこなわれたシリカプ(カジキマグロ)漁では、漁場の目印となるカムイで、アホウドリが飛んでいる所には必ずシリカプがいたといいます。シリカプ漁の前には頭骨に新しいイナウルを着せて飾り、お酒を奉げて漁を見守るよう祈ったといいます。また、沖で濃い霧が発生して視界不良になるなどの災難にあった場合には、レパカムイの着物であるイナウルを脱がせ嘴の付いた頭骨だけを頭にのせて祈り言葉を唱えながら落とし、嘴の先が示した方角に船を進めたといいます。命に関わる決断を委ねられるくらい信頼されたカムイであったということですね。ちなみに、我が祖父、千代吉爺の家では昭和の十年頃まで神棚の上にこのカムイが置いてあったそうで、海で遭難者が出たときに千代吉爺がこのカムイを頭の上から落として、無事かどうか占ったのを見たという話を親戚から聞いたときは、それまで博物館の資料でしかなかったレパカムイがリアルなカムイとして感じたのを覚えています。

カムイとされるアホウドリですが、一時は羽毛需要の拡大による乱獲で絶滅に瀕し、保護される対象に…。人間の行為が生態系に大きく影響することをしっかりと認識することは大事ですね。 J



イラスト/山丸ケニ

次回のテーマは「チプ(舟)」
本田優子(札幌大学教授)が担当します。

ウポポイ
NATIONAL AINU MUSEUM and PARK
民族共生象徴空間
JR白老駅から徒歩約10分

ウポポイPRキャラクター「トゥレッポん」

イランカラプテ
「こんにちは」からはじめよう。

■本田優子(ほんだゆうこ):金沢市生まれ。札幌大学教授。北大卒業後11年間平取町二風谷に住み、アイヌ語講師を務める。
■村木美幸(むらきみゆき):白老町生まれ。アイヌ民族文化財団常勤理事。先住民族アイヌの一員として文化継承活動に努める。
■山丸ケニ(やままるけに):白老町生まれ。アイヌ民族文化財団職員。ウポポイでアイヌ語体験プログラムを担当する。